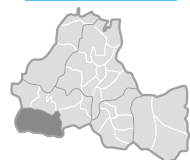


三方地区 (日高地域)



三方地区は、日高町の南西部に位置し、16行政区の900世帯余りで構成されています。すでに2集落は限界集落(人口の50%以上が65歳以上の集落)となっており、2021年度の人口2400余人は、過去10年間で500人減少したことになります。農地面積は、255ヘクタールですが年々遊休農地が増加しております。

このような状況の中、昨年10月、山本洋平さん(出石町上野)が、「繁殖和牛経営の新規就農をするため、牧草地用の農地を借りたい。」と実父の谷口秀則さん(羽尻)と一緒に来られ相談を受けました。

今回の相談に対応するため限界集落の羽尻区と隣接する殿区の区長、農会長で遊休農地対策会議を立ち上げて取り組みをした経過を報告します。

はじめに、2集落の区長、農会長と相談し、相談者の山本さんと一緒に



中嶋推進委員



鳥尾農業委員



準備が整った牧草栽培地



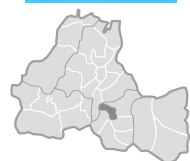
トラクターでの草刈り作業

に現地調査を行いました。次に集落内の未作付けの農地の借上げ予定地をリストアップして、農地所有者に面談し、農地の貸し出しについて内諾を得ました。これに基づき、ひょうご農林機構との調整により、6.1ヘクタールの利用権設定手続きを今年3月に終えました。

今回の農地調整の結果、集落内の遊休農地がほぼ解消されました。今後も農地利用最適化推進委員として、農地荒廃を防ぐお手伝いができればと思います。

(三方地区推進委員 中嶋貴太郎)

小坂地区 (出石地域)



昨年度より農地利用最適化推進委員となり、遊休農地の確認などの農地パトロール活動を行っています。私が担当しています小坂地区の遊休農地は現在のところ比較的少ないように思います。

小坂地区は、出石町の北部に位置し、13区の行政区があります。農地は約330ヘクタールあり、出石川を挟んで南北に広がる平坦地で主に水稻栽培が行われています。出石川の南側においては、鳥居区から片間区までの山裾に獣害防護柵が設置され、被害が減少しています。

昨年度より、地域農業を継続するために10年後の将来像を見据えた「地域計画」の取り組みがスタートしました。これは従来の「人・農地プラン」から「地域計画」に変更されたものです。

これから各集落等で計画策定を進めていただきますが、私たち委員も微力ながら協力させていただきます。



米本推進委員



川崎農業委員



小坂地区の農地

今後、農業者の高齢化と人口減少がさらに進み、農業の後継者問題はますます深刻化するでしょう。地域の農道、排水水路の維持管理作業の安全性の確保や作業の効率化を図るためにも、老朽化した排水水路の更新や排水路のパイプ化は必要と考えます。

作業しやすい農地環境を作ること、遊休農地の発生を防ぐ方法のひとつであると思います。そのためには、地主の理解が不可欠です。

農地利用最適化推進委員としての活動は2年目に入り、農業者、地域の皆さんとともに、地域農業・農地を守っていくよう努力します。ご協力をお願いします。

(小坂地区推進委員 米本博文)

「リレー栽培によるハウス野菜」

西沢 信弥さん(八社宮)

地元の八社宮地区で約10年前から農業に従事されている西沢信弥(32才)さん。

幼い頃から父親の農業に打ち込む姿に触れて育ち、自然と農業の道へ進まれました。

農業形態はビニールハウス46棟による野菜栽培と1.6haの水稻栽培です。

ハウス栽培の主な品目は非結球レタス(サニー、リーフ、フリル)、トマト、イチゴ、キュウリ、ホウレンソウ、キクナ、ハクサイ、ダイコン、スイートコーンなど多種にわたります。

父(西沢泰裕)さんの指導のもと、母、弟さんも加わり家族で農業経営に取り組んでおられます。

但馬地方のハウス栽培は積雪対策が課題です。毎年のビニールの張り替えは重労働ですが、最適な栽培環境を保つためには欠かせない対策だそうです。

また、但馬地域の農業者同士で連携して、ローテーションで野菜栽培を行い、年間を通じて安定供給できる「リレー栽培」の仕組みも確立されています。この時期の主力作物は非結球レタスです。

近年ではドローンを導入して水稻の薬剤散布をスタートされています。自ら操縦して弟さんとの協力体制により、年々規模も拡大されスマート農業の導入にも熱心です。

暖かい家族に囲まれ、若い感性と意欲に満ち地域農業を支えていく頼もしい農業者です。

今後の活躍がますます期待されます。

(農業委員 大谷 均)



リレー栽培で出荷される
レタス
(ひょうご安心ブランド)

「安全・安心の野菜づくり」

松居 信悟さん(出石町口小野)



松居信悟(36才)さんは愛知県出身で、農業とは無縁の仕事をしていました。

友人のところに行ったときに無農薬での野菜づくりをしておられるのを見て、熟練者しかできないと思っていた栽培が若い人でもできると気づき、無農薬栽培に興味を持たれました。令和4年に出石町で有機農業をしておられる中務喜紹さんを紹介してもらい、その年に家族で豊岡市に移住され、豊岡市農業スクールに入校されました。

出石町の認定農業者である中務喜紹さんと中嶋敏博さんのところで1年ずつ研修され、今年4月より豊岡市認定新規就農者となりました。

口小野地区に1haの農地を借り、夏はピーマン(1000本)を中心に有機のキュウリ、ナス、トマト、冬は有機のニンジン、カブ栽培に取り組まれます。「経営開始から3年間は慣行及び減農薬栽培、たじまピーマン栽培で経験を積み、5年後には有機栽培での農業経営を目指す」と話しておられました。

国が農薬の危険性をうたっていないことに違和感を持ち、自分で安全・安心な農産物を提供できる農家になりたいそうです。

豊岡は海や山の自然が豊かで趣味のロードバイクやファッションを楽しみながら農業を頑張りたいと話されていました。

(農業委員 仲川 弘之)